

野 芥 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第297集

1992

福岡市教育委員会

序

福岡市域内には埋蔵文化財が包藏され、その保護のため日々努力している次第です。やむなく破壊される遺跡については記録保存し後世に残すよう努めています。

本書は宅地開発に伴うその道路部分の調査成果です。宅地部分については埋土により保存され将来の調査に託すことになりました。本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが施主の進興社を初め、関係者の多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

本文目次

Iはじめ	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の記録	
1. 調査の概要	3
2. 竪穴住居址	4
3. 土壌	9
4. 溝状遺構	11
5. 捨立柱建物	16
6. 棚列	17
7. ピット出土土器	17
8. 包含層出土土器	19
IV 野芥遺跡第1次調査	
1. 調査にいたるまで	25
2. 発掘調査の組織	26
3. 調査の記録	27

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が福岡市早良区野芥五丁目において緊急発掘した野芥遺跡1次及び2次調査の発掘報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
3. 1次調査で掲載した図面は造構を小林義彦が、遺物を田崎真理が実測し、製図は小林が行った。また造構、遺物の写真も小林が撮影した。
4. 2次調査で掲載した図面は調査担当者のほか濱石正子、入江のり子、撫養久美子が行い、造構、遺物の写真撮影は松村が行った。
5. 本書の執筆、編集は1次調査を小林、2次調査を松村が行った。
6. 本報告に係わる遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
7. 本報告に関するデータは以下の通りである。

1次調査

遺跡調査番号：8841	遺跡略号：NKE-1	分布地図番号：84-A-5
調査地籍：福岡市早良区野芥五丁目340-1外		
工事面積：1431m ²	調査対象面積：250m ²	調査実施面積：265m ²
調査期間 1988年12月5日～12月19日		

2次調査

遺跡調査番号：9045	遺跡略号：NKE-2	分布地図番号：84-A-5
調査地籍：福岡市早良区野芥五丁目386-1		
工事面積：1538m ²	調査対象面積：311m ²	調査実施面積：300m ²
調査期間 1990年11月23日～12月22日		

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成2年8月22日、新興社より当該地の開発計画事前審査願いが提出され、それに伴い9月27日に埋蔵文化財の試掘調査を実施した。開発用途が木造の個人専用住宅であり、2m近い盛土がなされているので、その部分は現状保存が可能であり、市道移管予定の進入道路部に限り重機により掘削を行い、古墳時代の遺構を検出し、本調査を実施することとなった。

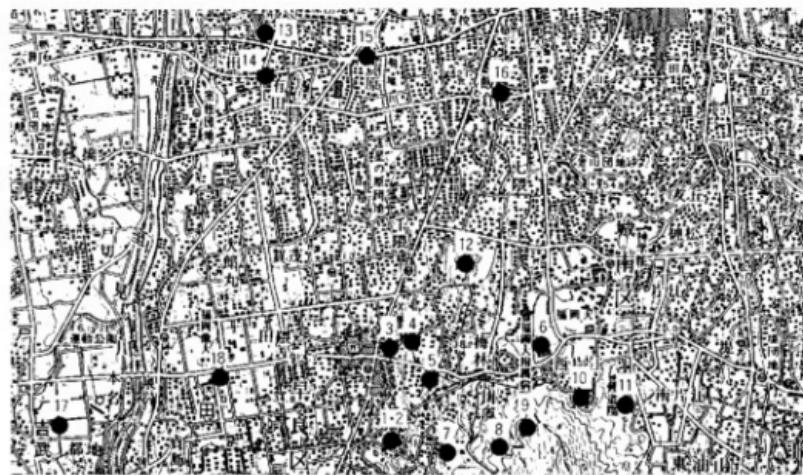
2. 調査の組織

調査委託	新興社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉
調査総括	埋蔵文化財課長 折尾学 柳田純孝（前任） 埋蔵文化財課第一係長 飛高恵雄
調査庶務	埋蔵文化財課第一係 中山昭則 寺崎幸男
調査担当	発掘調査 松村道博 試掘調査 吉留秀敏
調査・整理補助	浜石正子 入江のり子 撫養久美子
調査作業	山崎吉松 朱雀義雄 有吉貞江 柴田シズノ 古井モモエ 森友ナカ 西田マキエ 上原チヨ子 津田和子 野坂三重子 松本愛子
整理作業	飯田千恵子 半田恵子

II 遺跡の位置と環境

野芥遺跡群は早良平野の奥付、油山丘陵の西麓に位置する。早良平野は東を油山丘陵から派生する低丘陵の飯倉丘陵により限られ、西を叶ヶ嶽から北へ延びる長垂丘陵により今宿平野と分離され、その中央部を北流する室見川を中心とする大小の河川により形成された沖積平野である。今回の調査地点は福岡市の南に東西に横たわる油山丘陵が終束する西油山丘陵の西端裾部にあたり、西側に向かって緩やかな傾斜面を形成し、その裾部に遺跡は占地している。

早良平野には多くの遺跡が分布し、多くの調査がなされている。古くは藤崎遺跡や西新町遺跡の調査があげられるが本格的調査が行われたのは九州大学による有田遺跡の調査からである。それ以後閑静な田園地帯が都市化の波に呑まれ、大規模な宅地開発あるいは道路、学校等の公共施設の拡充、農業の基盤整備事業が実施され、それに伴い発掘調査が行なわれ、多大な成果



1.野芥遺跡2次調査 2.野芥遺跡1次調査 3.野芥遺跡群 4.梅林古墳
 5.七隈古墳群 6.影塚古墳群 7.駄ヶ原古墳群 8.大谷古墳群 9.大谷古墳群 10.倉瀬戸古墳群
 11.早苗田古墳群 12.千賀古墳群 13.有田古墳群 14.有田遺跡 15.原遺跡群
 16.飯倉古墳群 17.大石古墳群 18.田村遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/50,000)

を收めると同時に失ったものも量り知れない。周辺の遺跡をみると西油山丘陵から派生する丘陵上に後期の群集墳が集中している様相がうかがえる。先上器時代の遺物も出土しており、各時代の概略を述べよう。

先上器時代の遺跡は五ヶ村池遺跡、千賀熊添古墳等で数例の石器が出土しているに過ぎない。縄文時代前期の遺物も古墳の調査時に収集されたりして出土している。田村遺跡や四箇遺跡では前~晚期にかけての遺構遺物が出土する数少ない遺跡である。縄文時代後晩期から遺跡の数は増大傾向を示し、弥生時代には平野部の微高地に占地する。丘陵部にも前期から後期にかけての豪棺が多くみられ飯倉唐木遺跡では金海式豪棺から細形銅劍が出土している。現在調査が進められている東入部遺跡では中期後半の方形墳丘墓が確認され、豪棺墓から青銅製品や鉄製品など豊富な副葬品が出土している。先に述べたように油山の西丘陵部には260前後の群集墳が立地している。調査された古墳も多くその時期は6世紀後半から7世紀代にかけての横穴式石室が大部分を占める。先年押塚古墳が調査され5世紀前後の全長75mの前方後円墳であることが判明した。主体部は消滅し周溝と墳丘の一部が遺存している。墳丘からは円筒、形象埴輪列が検出され、この地域の有力首長の古墳である。また周辺からは方形周溝墓28基が確認され、一定

の場所に集中した状況を示す。油山から北へ延びる飯倉丘陵の基部にも全長27mの小規模な前方後円墳、梅林古墳がある。横穴式石室で5世紀後半から6世紀前半に比定されている。一方落址はあまり知られてなかったが飯倉丘陵あるいは入部圃場整備に伴う調査での検出例が増加している。飯倉A遺跡1次調査では弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居址等の集落が検出され、飯倉G遺跡1次調査では弥生時代後期の木棺墓等と共に古墳時代後期の堅穴住居址が5棟確認され、さらに中世の遺構も調査されている。飯倉F、H遺跡1次調査でも後期の堅穴住居址1棟が調査されている。以上概観したよう集落の在り方が極めて小規模である。調査面積が狭いためなのか、遺跡立地が丘陵頂部にあるため削平を受けた結果生じたものであろうか。いずれにしても撲滅集落というべき遺跡は発見されていない。

III 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地点は野芥遺跡群の南端、油山から派生する丘陵裾部にあたり標高30m前後を測る緩

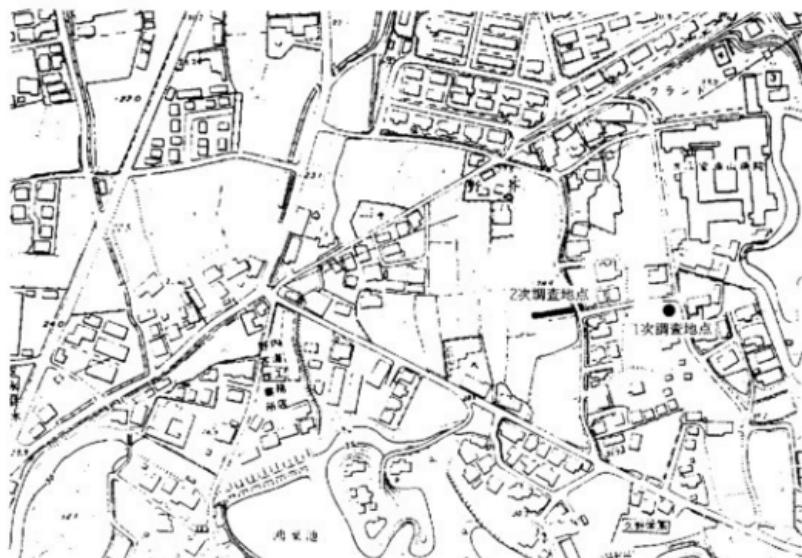


Fig.2 周辺地形測量図(1/4,000)



Fig. 3 野芥遺跡周辺測量図 (1/800)

将来市道移管予定の進入道路部だけの調査で、宅地部分については2m弱の盛土を行い文化財には影響を受けないので現状保存され将来の調査に託すこととした。以上の状況であったので調査は幅7m、長さ45mのトレンチ状の狭い面積であったが古墳時代後期の堅穴住居を中心とする遺構が全体に分布し、周辺全体に拡がる可能性がある。検出した遺構は古墳時代後期の堅穴住居4棟、溝1条、奈良時代の溝1条、古墳時代の掘立柱建物2棟である。他に夜白式土器も数点出土している。調査区が狹いため住居址の半分程の調査である。規模は一边が5.6~3.6mを測り、床面までは0.3~0.5mで比較的の遺構の残りは良好であったが遺物は極めて少なかった。奈良時代の溝は台地線と平行して主軸を南北にとり幅1.8m、深さ0.5mの規模である。埋土は洪水砂で埋没していた。

2. 堅穴住居址

1号住居址 (Fig. 4.PL.1)

調査区のはば中央部に位置する隅丸長方形の堅穴住居址である。北側半分は調査区外へ拡がり、全体の規模及び形状は不明である。現存する規模は東西5.5m、南北2.5m以上、床面までの深さ0.4mを測る。周壁に沿って内側に幅0.2m前後の周溝がめぐる。床面はほぼ平坦で東側が少し低くなる。床面には3個のピットが確認できたが南西隅のピット(P1)を除き、いずれも小さく浅いので主柱穴とは考えられない。P1は略円形で径が0.6mで南西隅に位置し、主柱穴

傾斜面に占地する。調査は1.2~1.5m余の盛土と遺構面までの表土を重機により削除した。土層は客土、水田耕土、床土、暗灰褐色砂質土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土となる。遺構は暗褐色砂質土から掘り込まれるものも少し確認できたが不明瞭であったのでその下層の黄褐色粘質土まで掘り下げて調査を実施した。

調査は開発用地の中で

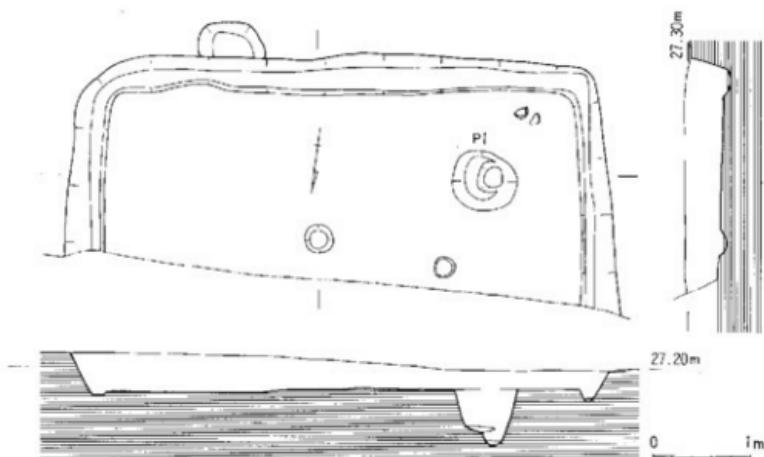


Fig.4 1号住居址実測図

と考えられるが、それに対応するピットが検出できなかった。遺物は覆土中からの出土が大部分で、床面から出土したのは須恵器 (Fig.5-13) 1点だけである。

出土遺物 (Fig.5)

縄文式土器 (1-4) 1、2は縄文時代晩期の研磨土器である。1は深鉢で口縁下に内外面とも沈線をめぐらす。2は口縁部が直立する浅鉢で外面屈曲部の直上に沈線をめぐらす。3、4は夜刀式土器の甕で外面には条痕が残り、突帯にはヘラ状工具による刻み目を施す。

土師器 (5~8) 5~8は土師器の壺と甕である。5は壺の体部から口縁部にかけての破片で口径13.4cmを測る。6、7は甕の胴部から口縁にかけての破片である。胴があまり張らない円筒形の胴部から外反する口縁部となる。胴部外面は刷毛目調整で、内面は下から上方向のヘラケズリである。7の口縁端は肥厚する。

須恵器 (9~17) 9~12は壺蓋である。9は口縁端部に不明瞭な段をもち、天井部と体部との境に鋸い稜をもつ。口径14.1cmを測る。10もほぼ同じ口径であるが平坦な天井部から湾曲して口縁部となり端部に段をもつ。天井部はヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。胎土には白砂粒を多く含み焼成良好で白灰色を呈する。11、12は丸味をもつ天井部から湾曲して口縁部となり端部は丸く收まる。13~17は蓋受けのかえりをもつ壺身の一群である。17は口径が14cm前後と比較的大きく、底部の2/3程がヘラケズリである。胎土には少量の砂粒を含むが精良で焼成は悪く白灰色を呈する。13~16は蓋受けからの立ち上がりが内傾し、口径12~13cmを測る一群で

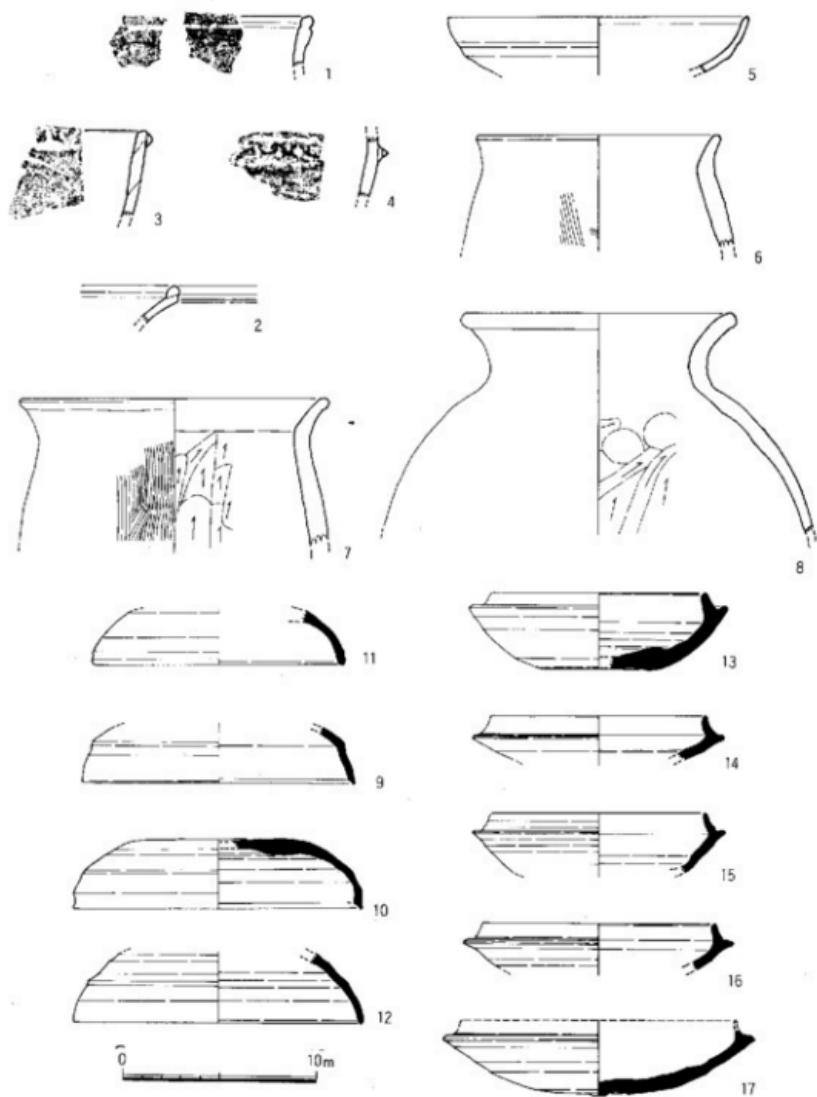


Fig.5 1号住居址出土遺物実測図

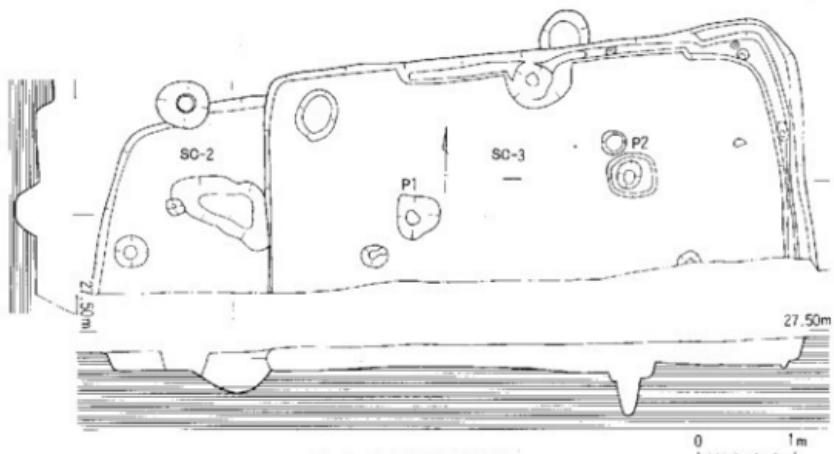


Fig. 6 2-3号住居址実測図

ある。底部はヘラケズリし、他は回転のナデを施す。

2号住居址 (Fig. 6)

1号住居址の南4mの位置にあり、東側を3号住居址に切られ、南側の大半は調査区外に拡がり、全体の1/6程の調査である。隅丸長方形の住居址と考えられ、現存長は東西1.7m、南北1.8m、深さ0.2mを測り、床面はほぼ平らである。北西寄りに平面略三角形の浅い掘込みがみられる。その西に径0.15mの深いピットがある。

出土遺物 (Fig. 7)

1は土師器の瓶の把手である。把手の断面は楕円形で表面には荒い整形で指跡が残り胸部との貼り付け部分にかけて指跡の稜線が明瞭となる。2は須恵器の壺蓋の体～口縁部にかけての小片である。胎土には小砂粒を含み、焼成は悪く灰色を呈する。体部から内湾して口縁部となり端部は丸くなる。

3号住居址 (Fig. 6.PL.1)

2号住居址と重複してその東にある隅丸長方形の住居址である。南側は調査区外へ拡がり全

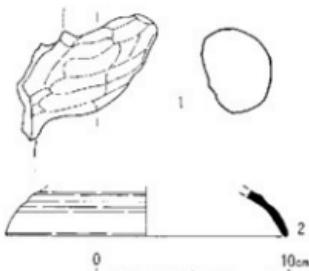


Fig. 7 2号住居址出土遺物実測図

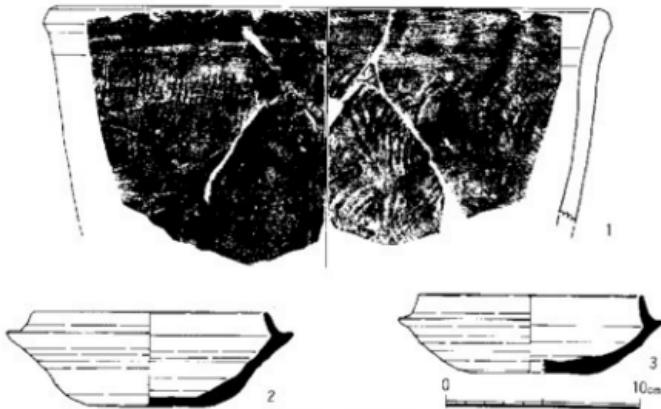


Fig.8 3号住居址出土遺物実測図

体の形態は明らかではない。規模は東西5.6m、南北2.4m以上、深さ0.25mを測る。周溝は北辺の西に寄った位置から始まり東辺まで続く。幅約0.2mで、東壁に近い所で屈曲し、周壁より内側0.1m内外を逆L字状にめぐる。また周溝内には楕円形の小ビットが数個認められた。床面はほぼ平坦で主柱穴2個があり、P1は径0.45m、深さ0.45m、P2は径0.5m、深さ0.35mを測る。北壁中央部には径0.7m、深さ0.4mの大型ビットが認められる。

出土遺物 (Fig.8)

1は土師器の深体である。整形には須恵器の手法を用い、外面は平行のタタキ、内面は青海波文のタタキでその上からナデ調整を行いタタキの跡をナデ消している。胎土には小砂粒を含み焼成はあまり良くなく淡黄褐色を呈する。2、3は蓋受けのかえりをもつ須恵器の坏身である。底部はヘラケズリ、体部から内面はヨコナデである。口径は11.5~12.0cm、髙4.0~5.9cmを測る。

4号住居址 (Fig.9)

2号住居址の西2.2mに位置し、ほぼ同じ向きをとる住居址である。南側は調査区外へ拡がり、1/2程の調査であるから全体の形状は不明であるが隅丸の長方形の平面形をもつものであろう。規模は東西3.6m、南北1.9m以上、床面までの深さ0.15mを測る。床面はほぼ平らで北壁寄りにビット2個 (P1・P2) がある。P1は径0.52m、深さ0.43m、P2は径0.36m、深さ0.41mを測り主柱穴と考えられる。

出土遺物 (Fig.10)

遺物の出土は少なく実測可能な土器は2点だけで、1は土師器の瓶の胴～底部片である。全体に摩耗が著しく調整は明確ではないが内面はヘラケズリ、外面は刷毛目調整であろう。2は須恵器の蓋である。丸い天井部から直立して口縁部となり端部は丸くなる。胎土に少量の砂粒を含み焼成良好で茶褐色を呈する。

3. 土壙

1号土壙 (Fig.11.PL.2)

調査区の東寄りの位置に検出した大型の不整形土壙である。規模は東西4.9m、深さ0.25～0.3mを測り、長椭円形を呈する。断面形は皿状を示す。土壙の北東隅には0.8～0.9mの台形状を呈する大きな自然の花崗岩がある。土壙が浅いこともあり床面

にはは密着した状態で出土した。自然の転石であるのか否か不明である。他に頭大から拳大の礫が多く出土しているが意図的な所産ではない。

出土遺物 (Fig.12)

1は夜白式土器である。小破片のために口径は不明、残存器高5.2cmを測る。胎土は白砂粒を多量に含み、焼成は良好で暗褐～黒褐色を呈する。外面の口縁直下に貼付突帯文をもちヘラ状工具による刻み目を入れる。内側には擦痕が認められ外側はナテ調整である。2、3は土師器の甕である。2はふくらみをもつ胴部から肥厚し外反する口縁部となる。胴部内面は縦方向のヘラケズリ、外面はナテ調整である。4は須恵器の器形、技法を模した土師器の杯である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良好ではなく軟質で淡橙茶褐色を呈する。底部はヘラケズリし他のナテ調整である。口径13.8cm、器高3.9cmを測る。5～8は須恵器の壺蓋である。5、7は天井部が平坦でヘラケズリをし、口縁部を直立させ端部を尖り気味に丸くする。8は口径13.9cm、器

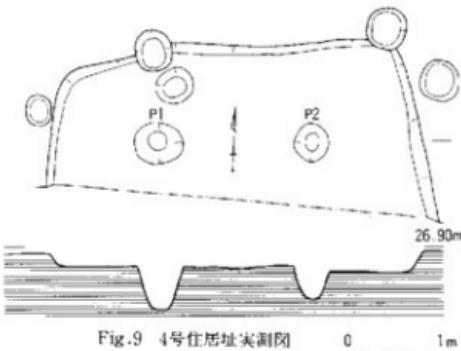


Fig. 9 4号住居址実測図

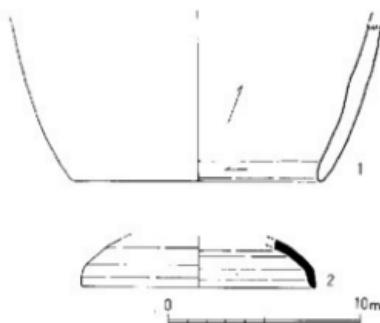


Fig. 10 4号住居址出土遺物実測図

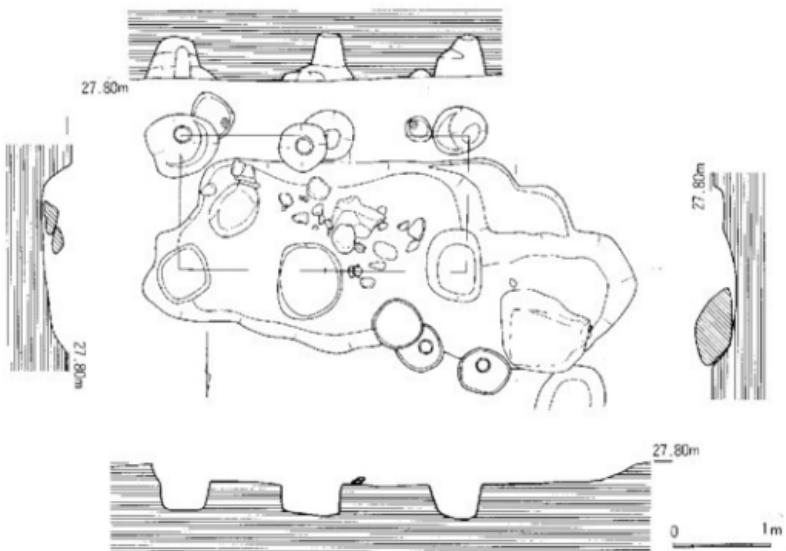


Fig.11 1号土壙、1号掘立柱建物実測図

高3.9cmを測る。ヘラケズリの天井部から内湾して口縁部となり内側に鈍い段をもつ。胎土には少し砂粒を含むが焼成は良好で灰白色を呈する。9は壺身で口径13.0cm、器高3.8cmを測り、底部はヘラケズリ、他はヨコナデである。蓋受け部から口縁部は内傾し、立ち上がりは高い。

2号土壙 (Fig.13.PL.2)

調査区の南西隅に検出した平面長方形を呈すると考えられる土壙である。大部分は調査区外へ拡がり、全体の形状は明らかではないので一応土壙としたが住居址の可能性が強い。北壁は直線で直角に曲がり四壁も直線的に延びる。床面はほぼ平坦で深さ0.22mを測る。

出土遺物 (Fig.14)

いずれも須恵器である。1は壺蓋であろう。2、3は蓋受けのかえりをもつ壺身である。口縁部の内傾は強く立ち上がりは短い。底部はヘラケズリで他はヨコナデである。4は縁の胸部片である。胸部中央に2条の凹線をめぐらし、その上に横状工具による刺突文をもつ。胎土には砂粒を多く含み、焼成もあまり良くなく軟質で灰白色を呈する。

3号土壙 (Fig.13)

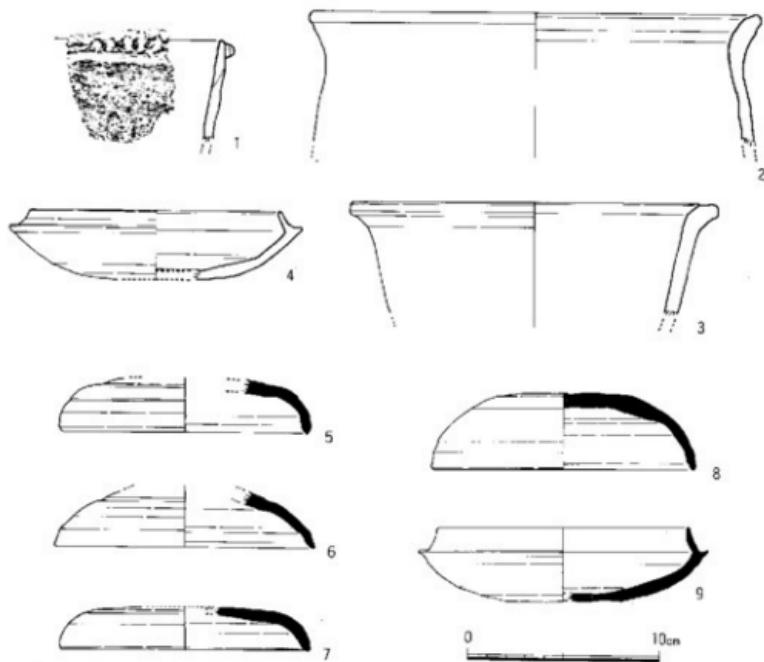


Fig. 12 1号土壤出土遺物実測図

西辺を2号土壤に切られ、その東側に位置し、平面が隅丸長方形を呈する土壤である。南北2.3m、東西3.1m以上、深さ0.25mを測り床面はほぼ平らで中軸線沿いに浅い皿状ピットが2個ある。壁面は緩やかな傾斜を示し、北、東壁は直線的であるが南壁は湾曲し壁面中央に深さ0.1mの浅い土壤状の掘込みがみられる。この土壤も2号土壤とともに住居址の可能性があるが、小規模なため土壤とした。出土遺物は土師器、須恵器の小片で実測可能な遺物は出土しなかった。

4. 溝状遺構

1号溝 (Fig. 15.PL.3)

調査区の東寄りの位置をほぼ直線的に南北に走る溝である。幅1.2~1.7m、現存長5.5m、深

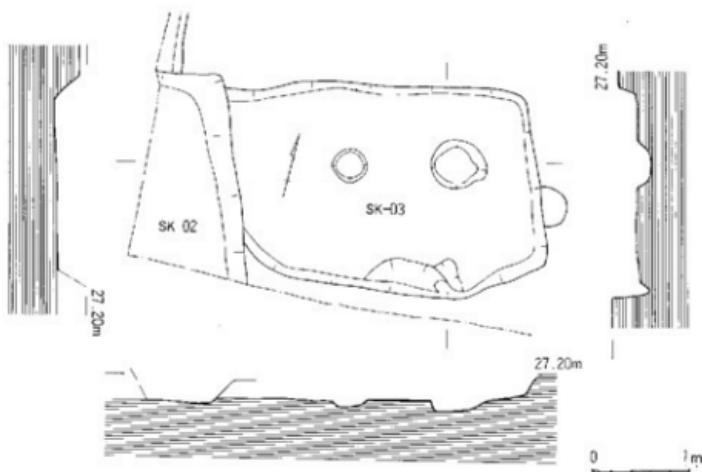


Fig. 13 2・3号土壤実測図

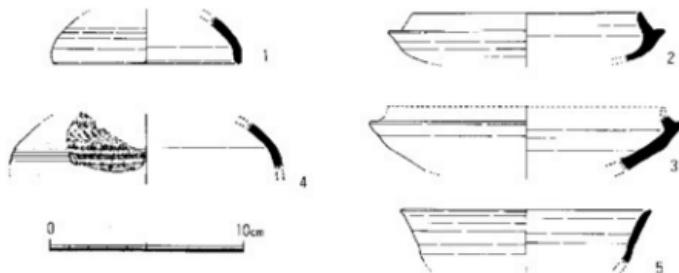


Fig. 14 2号土壤出土遺物実測図

さ約0.2mを測り断面皿状を呈する。埋土は粗い砂で覆われ、北側に礫が多く出土している。水により一時的に埋没したものであろう。

出土遺物 (Fig. 17・18)

土師器 (1~4)

1は甕の把手である。内面はヘラケズリで把手には整形時の指跡が残る。断面はほぼ円形で上方に返りをもつ。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で色調は淡明橙色を呈する。2~4は甕である。胴部から口縁部にかけての破片で口縁部が強く外反し、胴部内面はヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデである。4の口縁端は少し肥厚している。

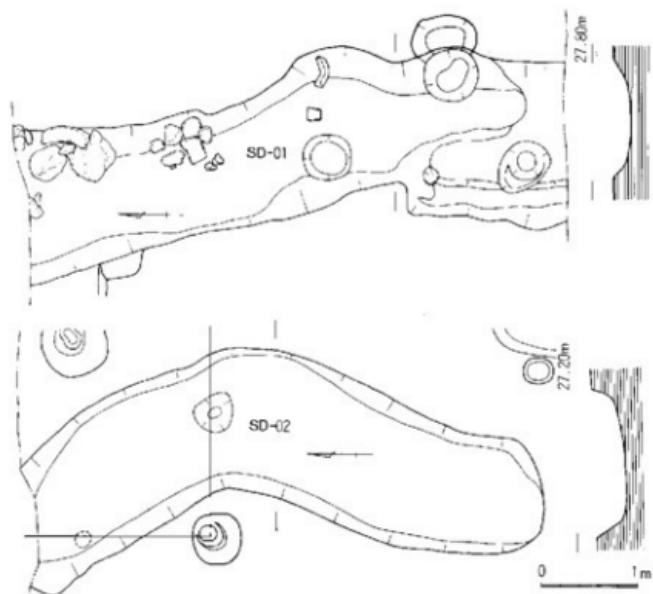


Fig. 15 1・2号溝実測図

須恵器 (5~19)

5は高壺の脚部片である。胎土は緻密で焼成は良く灰白色を呈する。端部ははね上がり断面三角形になる。内外面ともナデ調整であるが外面に整形時のしづり痕がある。6~10は蓋である。6は深みのある蓋で口径10.8cm、器高3.5cmを測る。天井部はヘラケズリで体部～口縁部はヨコナ

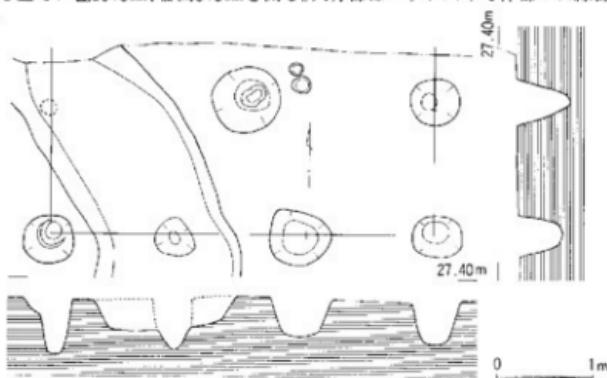


Fig. 16 2号櫛立柱建物実測図

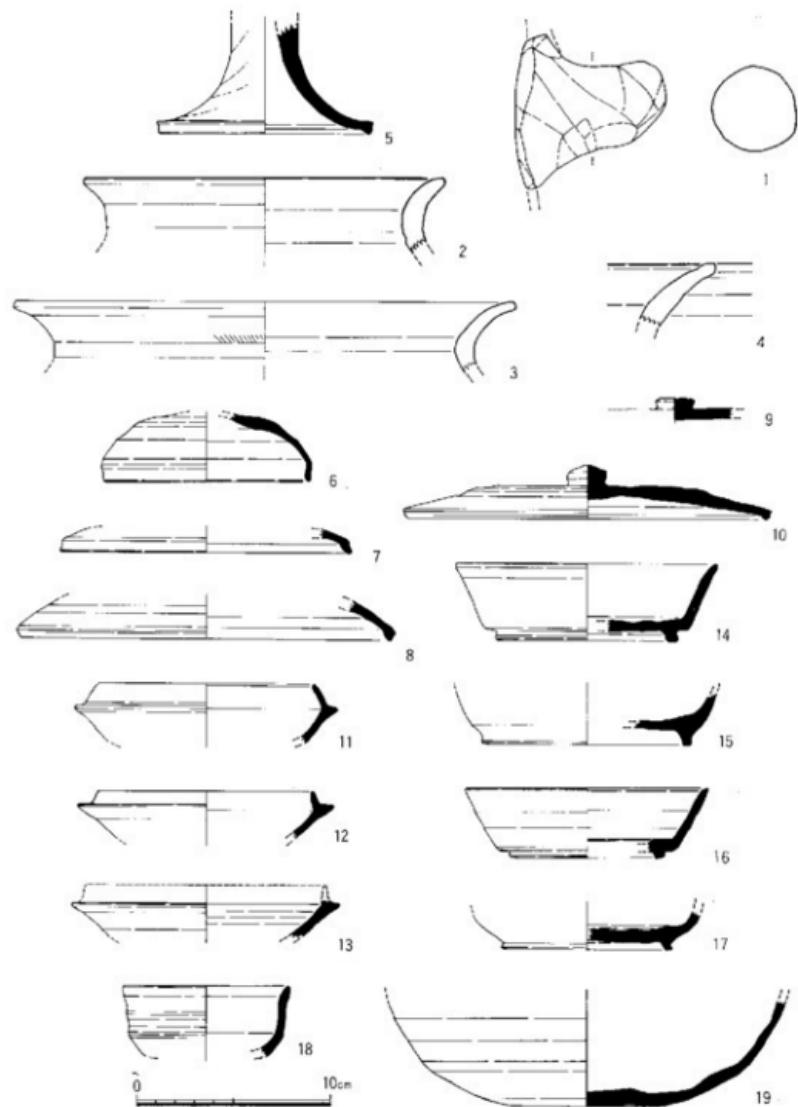


Fig. 17 1号溝出土遺物実測図

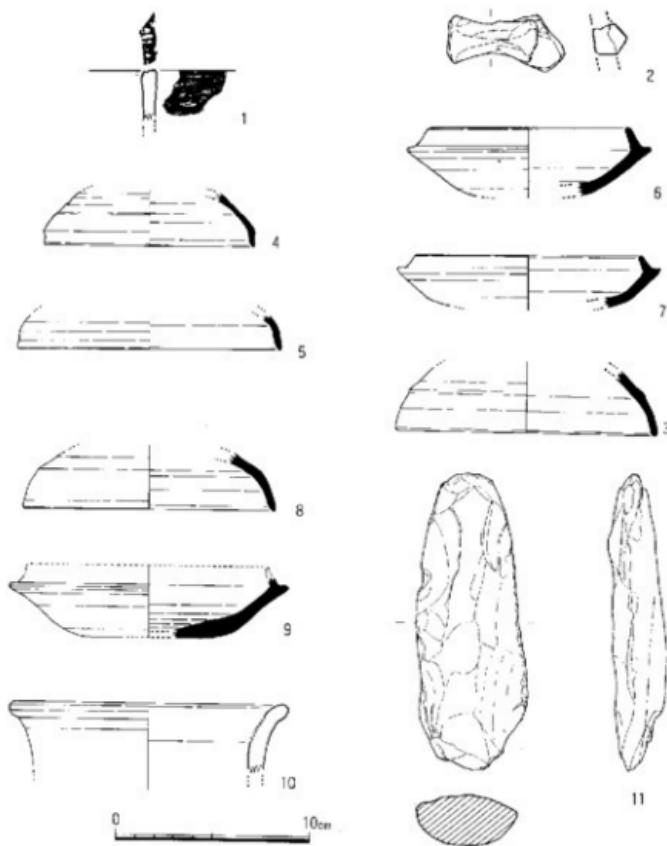


Fig.18 1・2号溝、1・2号掘立柱建物出土遺物実測図

テである。7~10は扁平な天井部で口縁部を短く屈曲させるもので器高は低い。9は扁平なつまみで10は擬宝珠形のつまみとなる。天井部はヘラケズリでその後ナテ消している。11~13は蓋受けのかえりをもつ环である。11の口縁部は少し内湾気味になる。12、13は短い口縁部の立ちあがりで外反して端部は尖る。14~17は高台付环である。高台は低く角張り外側に「八」の字状に開く。14、16は体部から直線的に外に開き、15、17は内湾気味に真っすぐ立ち上がり口縁部となる。18は高台付环であろう。胎土には小砂を多く含み焼成は良く器表面は黒色を呈する。

石器 (Fig.18-11)

粘板岩系の白灰色を呈する打製石斧である。表面は両側より剥離加工を行うが裏面は刃部と基部だけの調整で他は自然面の丸味を残す。全長15.3cm、最大幅5.3cm、厚さ2.7cmを測る。

2号溝 (Fig.15.PL.3)

調査区の西寄り、4号住居址と3号土塙の間に位置する。南端は調査区内で終了し北側はさらに調査区外へ延びるが集落を周するものではない。規模は幅1.45m、現存長5.4m、深さ0.4mを測り、中央部で「く」の字に屈曲する。

出土遺物 (Fig.18)

1は夜臼式上器である。直立する口縁部で上面に貝殻の押圧文、外面には条痕文が残る。2は弥生式土器であろう。器表面にリボン状の貼付文様をもつ。貼付文は長さ4.2cm、最大幅2.8cm、最小幅1.5cmを測る。胎土には砂粒を多く含み粗く、焼成は良く淡黒灰色を呈する。3~5は蓋である。3は赤焼須恵器である。胎土には小砂粒を含み精良で焼成は良く小豆色を呈する。体部と口縁部の境に鈍い稜をもち、その下をナデにより窪ませている。口縁端部の内面には段の跡を残す。4、5は丸い天井部に直立する口縁部となり、端部は尖り気味に丸まる。6、7は蓋受けから口縁部の立ちあがりが短く内傾する形態である。底部はヘラケズリで他はヨコナデである。

5. 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (Fig.11.PL.2)

1号土塙と重複して検出した造構である。柱穴は略円形で径0.5~0.8m、深さ0.5m前後を測る。柱間距離は梁行1.40m、桁行の柱間距離は1.50mを測る1間×2間の小規模な建物である。主軸はほぼ東西方向をとる。

出土遺物 (Fig.18)

須恵器2点が出土している。8はP2から出土した蓋である。丸い天井部から内湾して口縁部となる。天井部と口縁部の境に不明瞭な稜をもつ。9は环で底部はヘラケズリで体～口縁部はヨコナデである。蓋受けから口縁部は強く内傾している。

2号掘立柱建物 (Fig.16)

調査区の西側、2号溝に切られる建物で、北側は調査区外へ延び梁行は不明で桁行は3間である。桁行の柱間距離はほぼ1.30mでそろい梁行も1.30~1.35mを測る。

出土遺物 (Fig.18-10)

土師器の蓋で胴部から口縁部にかけての破片である。口径12.6cmを測る深鉢状の小型品と思われる。円筒状の胴部から少し外反する口縁部で端部が肥厚する。内面はヘラケズリで外面は

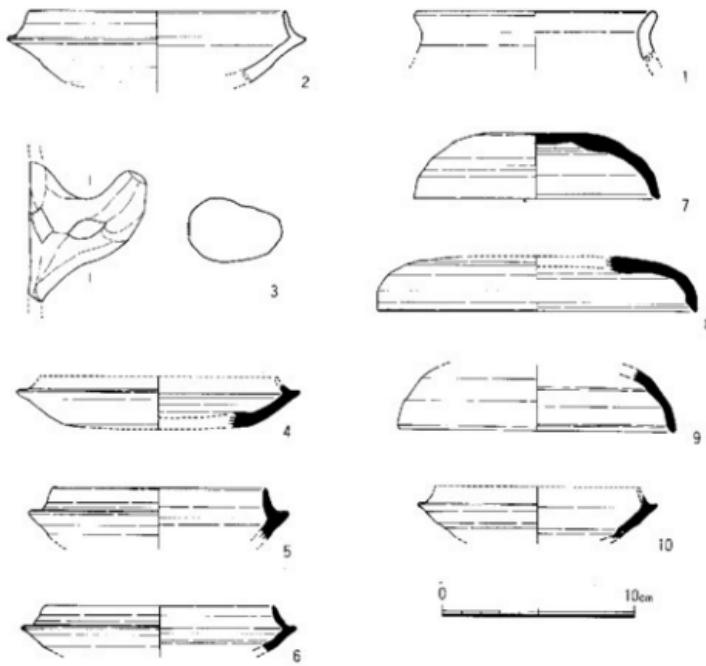


Fig.19 ピット出土遺物実測図

ナゲ調整を行う。

6. 棚列

1号棚列（付図）

2号掘立柱建物の西側に南北に走る棚列で柱穴4個を確認することができた。柱穴の平面形は略円形で径0.5m前後で深さ0.3~0.4mを測る。柱間距離はP1~P2、P2~P3は1.70m、P3~P4は1.5mを測る。ピットの埋土は2号掘立柱建物と同様暗褐色である。

出土遺物（Fig.19-1）

土師器の甕である。丸味をもつ胴部に少し外反する短い口縁部がつく。胴部内面はヘラケズリで外面はヨコナテである。胎土に砂粒を多く含み焼成は悪く軟弱である。

7. ピット出土土器（Fig.19）

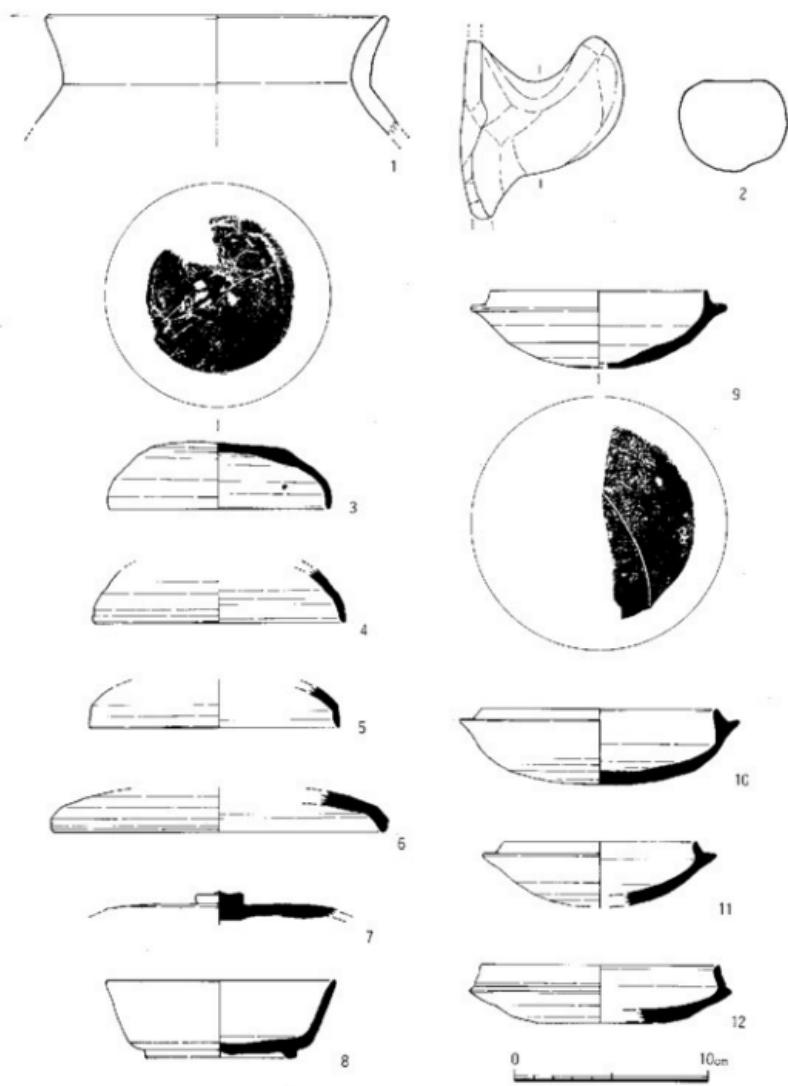


Fig. 20 包含层出土遗物实测图(I)

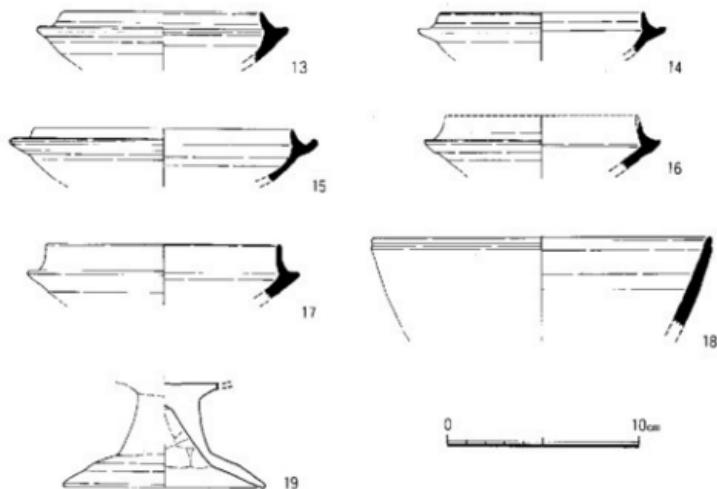


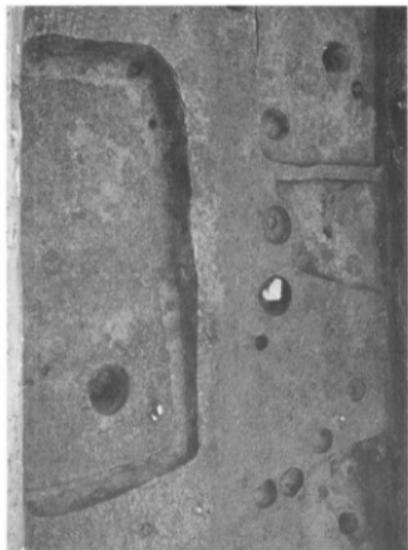
Fig.21 包含層出土遺物実測図(2)

2は土師器である。形態、技法とも須恵器を模している環である。胎土には砂粒を多く含み焼成は悪く明橙色を呈する。3は甕の把手で外面に整形痕が荒々しく残る。4~6、10は蓋受けをもつ須恵器環である。4、6は口縁部の内傾が強く、5は外反して立ち上がる。底部はヘラケズリを行い他はヨコナデ調整である。7~9は須恵器蓋である。7は天井部が丸味をもちヘラケズリし、体部～口縁部はヨコナデし、口縁部の内側端部を面取りし尖らせている。胎土には小砂粒を少し含み、焼成はあまり良好ではなく外面は淡黄褐色、内面は淡灰色を呈する。8は天井部が平でヘラケズリを行っている。口縁部は直立し端部内面に不明瞭な段を有する。

8. 包含層出土土器 (Fig.20・21)

1、2は土師器である。1は甕で球形に近い胴部から外反する短い口縁部となる。胎土には小砂粒を多く含み焼成は良く明橙色を呈する。全体に摩耗が著しく調整は不明である。2は甕の把手である。先端部は上に返り断面は角張った楕円形である。3~7は須恵器の蓋である。3は少し深めの环蓋で天井部をヘラケズリし体部～口縁部はナデ調整で端部は丸くなる。天井部にヘラ記号をもつ。4は口縁部片で内側に沈線状の段をもつ。5は口縁部と天井部との境に不明瞭な稜をもつ。内外面ともヨコナデで口縁部を尖らせている。6は扁平な蓋である。天井部はヘラケズリ

で平で、端部を緩やかに屈曲させ、外面に沈線をめぐらす。7は扁平なつまみを有する蓋で、中心部が尖る。天井はヘラケズリを行っている。8は高台付坏である。底部をヘラケズリの後低い高台を貼りつけている。底部から屈曲させ直立気味に口縁部となり端部は円く収まる。9は丸底の底部をヘラケズリしヘラ記号をもつ。口縁部の蓋受けはほぼ直立し端部は丸くなる。10は9より少し大きく、体部の張りが大きく底部から内湾して口縁部となる。底部はヘラケズリ。他はヨコナデである。12は口縁部の内傾が強く全体に扁平となる。11は蓋受けが小さく口縁部は内傾し外反している。



(1) 調査区全景 (北より)



(2) 1号住居址 (北より)

(3) 3号住居址 (北より)



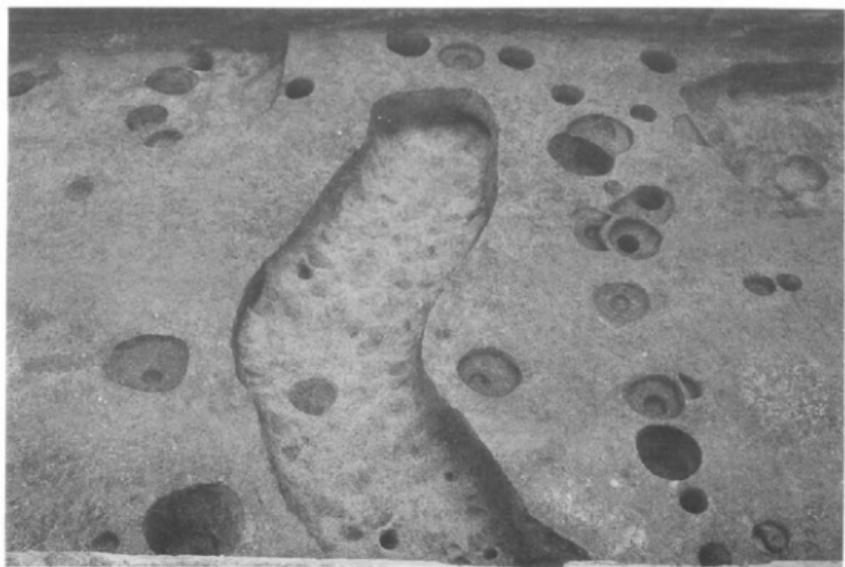
(1) 1号土壤、1号据立柱建物（北より）



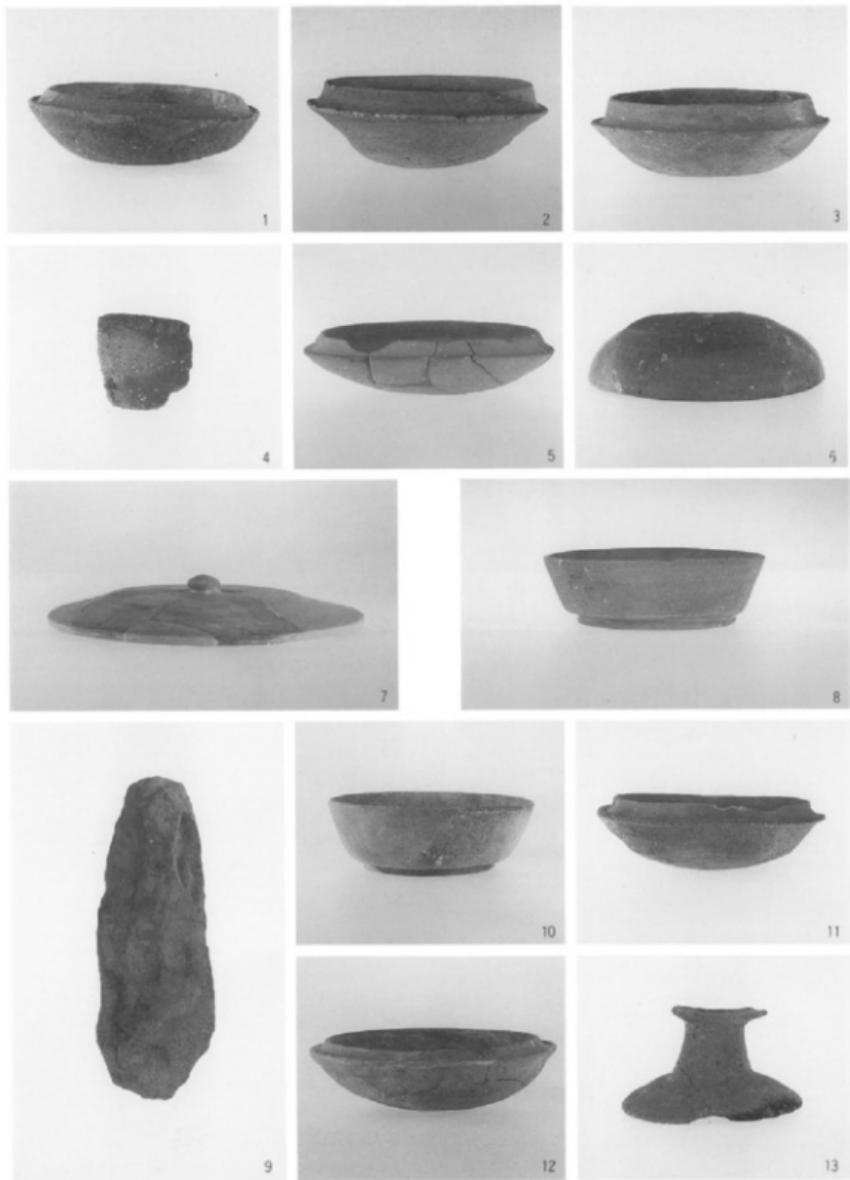
(2) 2号土壤（西より）



(1) 1号溝状置構 (北より)



(2) 2号溝状置構 (北より)



1…1号住居址 2,3…3号住居址 4~6…1号土壤 7~9…1号溝
10~13…包含層

野芥遺跡第1次調査

1. 調査にいたるまで

野芥遺跡は、油山西麓の北西端にあり山塊から派生した舌状の丘陵上に立地する。この油山西麓には古墳時代後期の小円墳群が多数確認されているが、本遺跡周辺は宅地化が早く進んでいたために1978年に実施された分布調査時には遺跡の空白域として周知化されていなかった。しかし、1986年には、野芥六丁目の宅地造成地内で弥生時代の共同墓地が発見され、周辺丘陵域における遺跡の存在が予想されるに至った。この岩隈遺跡は、本調査区の南西方450mの距離にあり、弥生時代前期末～中期後半の土塚墓、甕棺墓79基等が調査されている。

こうした中、野芥五丁目地内における分譲住宅の開発が段谷産業株式会社で事業計画され、その旨の開発審査願いが提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、丘陵上に立地する遺跡の存在が予想されることから試掘調査を実施し、歴史時代の柱穴群を検出した。このデータを基に協議した結果、開発計画の変更は難しいため破壊される最小限の地域のみ発掘調査して記録に留め、そのほかは現状保存を図った。



Fig. 22 第1次調査地点周辺現況図 (1/600)

2. 発掘調査の組織

調査委託 段谷産業株式会社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係

庶務担当 飛高憲雄（第2係長） 岸田隆

調査担当 小林義彦

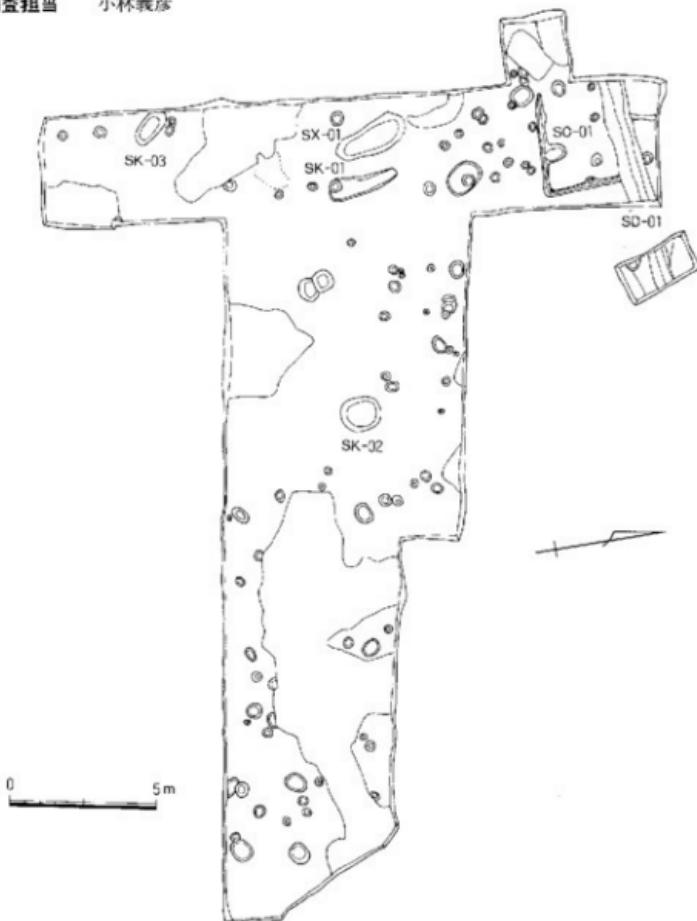


Fig.23 第1次調査地点塗抹配置図 (1/200)

整理補助 田崎真理

発掘・整理作業 荒巻ヤチ代 大瀬良清子 木村良子 柴田タツ子 坂田美佐子

堤籠代 土妻崎孝子 西島タミエ 西島初子 吉岡アヤ子 吉岡員代

吉岡竹子 吉岡蓮枝

3 調査の記録

1). 調査の概要

発掘調査の地点は、油山西麓に北西端から干隈・飯倉へとのびる低丘陵の基部から西へ又状に短く派生する舌状丘陵の西側斜面上に位置する。谷を挟んだ東側の丘陵上には影塚古墳群と駄ヶ原古墳群が分布する。また、北方約1kmの低丘陵上には全長27mの前方後円墳である梅林古墳がある。

発掘調査は側溝や埋設管の布設によって破壊される道路用地についてのみ実施し、住宅用地は現状保存を図った。そのために申請地の中央を東西にトレーニング状に長くのび、その西端が南北に拡がるT字状の変則的な調査区の設定になった。調査地は、表土下20~30cmで黄褐色ローム層になり、遺構面が検出される。遺構は、竪穴住居址・土壤・溝と柱穴を検出した。柱穴の中には柱痕跡を残すものもあるが、現状では掘立柱建物址としてはまとまらなかった。また、遺構の上面には遺物包含層がうすく堆積しているが、遺物の量は少ない。この遺物包含層は從前の宅地化に際して丘陵の尾根筋が削平されているために調査区の中央より東は消失し、西斜面上ほど厚みを増す。



Fig.24 第1次調査区全景（東より）

2). 窪穴住居址

窓穴住居址は、調査区の北西端の緩斜面上で1棟検出したが、削平が著しい。調査区外の丘陵尾根や緩斜面上にも抜がっていることが考えられる。

SC-01 (Fig.25~28)

調査区の北西端に位置する窓穴住居址で、北側はSD-01に切らされている。住居址は壁面が削平を受けて消失しており、東と南側の周溝を残すのみである。南壁の東寄りの位置には凹レンズ状の浅い窪みがあり、竈の基底面が残っていた。床面が赤く焼け、周囲には焼土塊と炭片の混入した灰層が堆積していた。柱穴は、床面中央の東西に並ぶP-1・2の2本が主柱穴となり、平面形は一辺が4.0~4.2mの方形に復原できよう。遺物は少ないが、竈の東袖際からは須恵器壺身と土師器甕が出土している。

1は、口径9.5cm、器高4.2cmを測る須恵器壺である。体部は丸みをおびた底部から直口ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部には気孔があり、大きく膨らんでいる。胎土は精良で、焼成は堅緻である。色調は灰紫色を呈す。2は土師器甕の底部である。内外ともにナデ調整を施し、内面には指頭押圧痕が明瞭に残る。

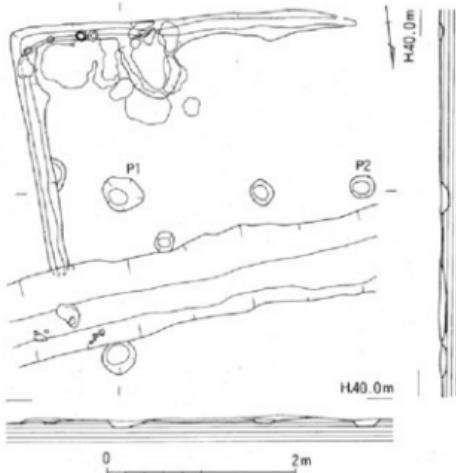
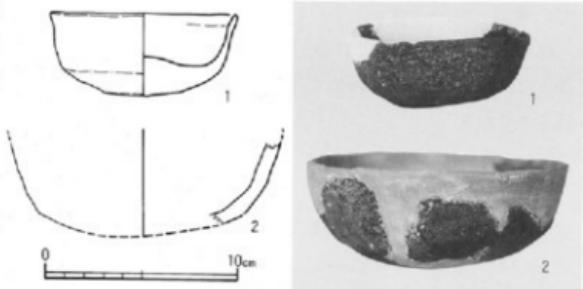


Fig.25 SC-01実測図(1/60)



Fig.26 SC-01全景（北より）

外面には2次焼成による赤変がみられる。胎土中に粗砂粒を多く含み、焼成は良好。



3). 土壙

土壙は、調査区の西方に偏して3基を検出した。

平面プランは、円形と長方形であるが、形状の相違が直ちに機能や時間差につながるものとは云えない。また、出土遺物もなく時期的なものも明確でない。

SK-01 (Fig.29・30)

本址は調査区の中央部西端に位置し、SC-01の南方5mの距離にある。平面形は、長軸244cm、短軸65cmを測るやや弓なりの長方形プランをなし、主軸方位を南北方向にとる。深さは2~10cmで、断面形は浅い舟底状をなす。遺物は、弥生式土器と土師器、須恵器片が少量出土している。

SK-02 (Fig.29・31)

本址は調査区のほぼ中央部に位置し、東方7mの距離にはSK-01がある。平面形は、長軸137cm、短軸118cmの円形プランをなし、主軸方位N-7°-Wにとる。深さは23~32cmを測り、断面形は逆台形をなす。壇底は平坦であるがやや南に傾斜する。遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器片が少量出土している。

SK-03 (Fig.29・32)

本址は調査区の南北端にあり、SK-01の南西6mの距離に位置する。平面形は、長軸142cm、短軸68cmの隅丸長方形プランを呈し、N-45°-Wに主軸方位をとる。深さは30cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。

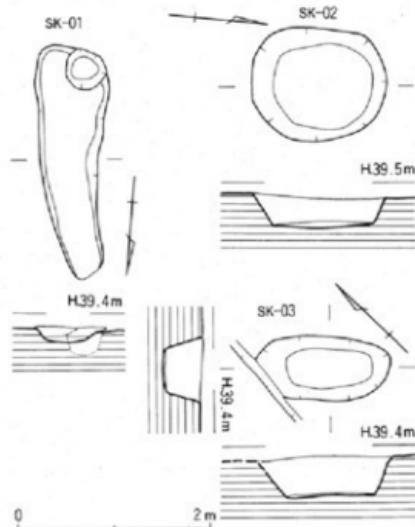


Fig.29 SK-01~03 実測図(1/60)

4). 溝

溝遺構は調査区の北側で1条検出した。本調査区で最も新出するものである。

SD-01 (Fig.33)

調査区の北西端部で検出した溝で、SC-01の北側を切っている。溝は、東西方面に直線的にはしり、現長で約8mを測る。断面形は、浅い蕭鋸状をなし、上層は黒褐色土、下層は褐色土が薄く凹レンズ状に堆積していた。遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器のほか白磁や明染付片が出土しているが、いずれも小片で微量である。

5). 包含層出土の遺物

調査区は宅地化に際して著しい削平と擾乱を受けているが、西側の緩斜面上には遺物包含層が堆積していた。この包含層中には、弥生式土器や土師器・須恵器のほか陶磁器片等を含むが量的に微量である。

3は、口径10.1cm、底径4.9cm、器高1.7cmを測る同安窯系の青磁皿である。体部は短く外反して立ち上がる。やや灰色がかかった精良な胎土に半透明の薄い灰オリーブ釉がかかっている。

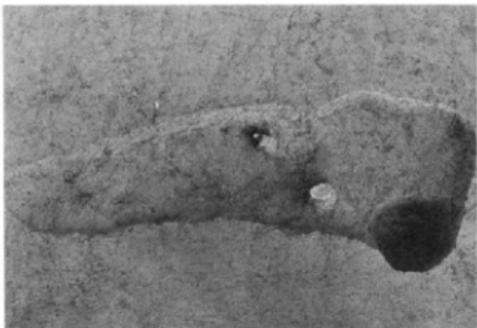


Fig.30 SK-01全景

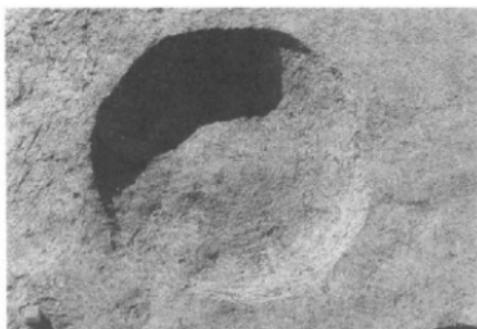


Fig.31 SK-02全景

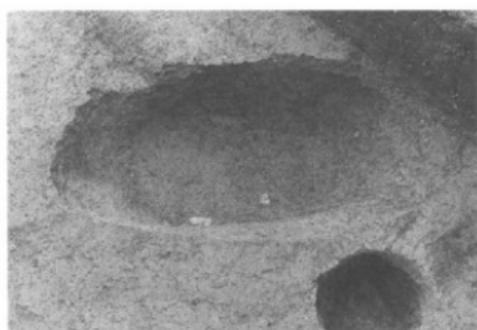


Fig.32 SK-03全景

4. おわりに

野芥遺跡の第1次調査は、トレチ状の限定された調査で遺跡の全容や性格等を十分に把握することはできなかったが、未周知の遺跡を調査した意義は大きい。調査区は、宅地化による削平が著しいが、竪穴住居址・土壙・溝等の遺構を検出した。竪穴住居址は、7世紀前半に比定



しうる。これは当該期の集落址の展開を十分に予想させるもので、その拡がりを確認するとともに周辺山麓に分布する後期古墳群との繋がりを検討していくことが今後の問題点として提起されよう。また、東西方向の溝は微量ながらも明代染付を含むことから比較的下がった年代が与えられよう。その機能については明らかでないが、集落址を構成する一部であることは明らかで、古墳時代後期の竪穴住居址同様に周辺域での調査成果の集積が望まれる。

Fig.33 SD-01全景

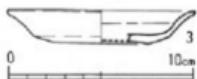


Fig.34
包含層出土土器実測図(1/3)



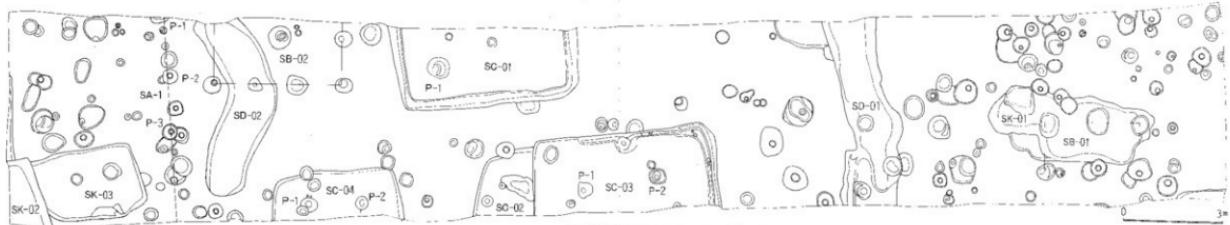
Fig.35
包含層出土土器



Fig.36 SC-01, SK-01~03全景



Fig.37 遺 路 遠 景



野井遺跡2次調査遺構全体図(1/120)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第297集
野芥遺跡

1992年3月15日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 有限会社 松古堂印刷
福岡市西区周船寺1丁目7-64
